きびのさと

NO.90
月刊

第十一輯　雑集篇　第七号

昭和四十年十二月一日　発行　（非売品）
岡山県都窪郡吉備町東町一二五字垣方呼電四三七番
吉　備　観　光　協　会

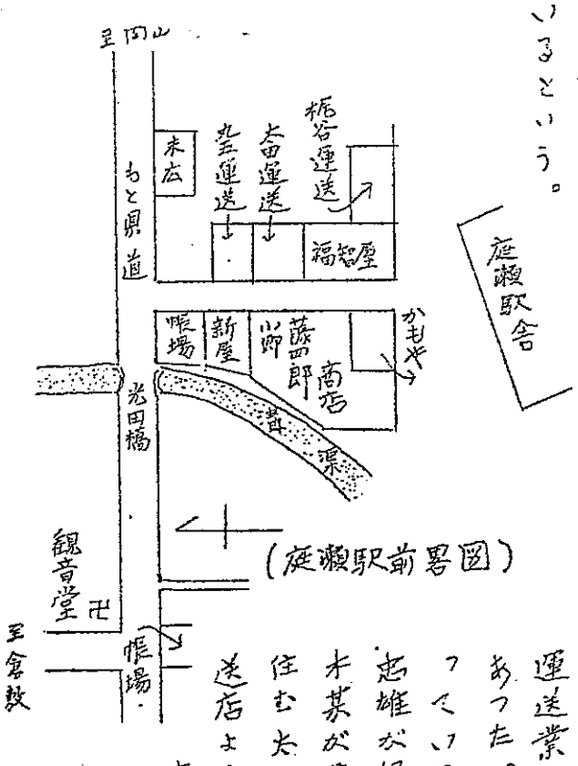
第81号つづき

○ 庭瀬駅前繁昌記　（そクニ）

藩政時代から続いている「栗坂屋」の先祖はいまの庄村上栗坂の出にして、小御小四郎という人が戸川氏が撫川に知行をうけて栄えた享保の頃に、西向に移って料亭を開業したのが始まりとされている。

小御小四郎―文吉―吉造―宇三郎―文治―利郎（当主）六代目の家筋である。

「万能屋」は松本儀三郎という人で、いまの園部医院の處にあった。子孫は東京に移った。墓代の墓所は観音院内にある。「寿」（ことぶき）は東町のいま開本自動車店の屋敷で、もと川入屋という料理屋を引継いで高橋天津という女性が経営していた。「卯月」は撫川町のいまの所司利男の屋敷がそれで松本増次郎が経営していた。さて駅前に戻るが、加茂屋は庄村の内田謙一というものが開業していたが、明治の末頃にいまの「よしや」にかわった。「よしや」は妹尾の出で吉田長次郎。かもやの向かい側に「福智屋」があった。後方にこの地の太田三次郎が譲り受けて「福三」という屋号で営業を継続していた。その跡が日本通運株式会社庭瀬支店になっている。「福智屋」は林　磯次郎といい、二人の男の子があった。長男精太郎は朝鮮に渡り後ち死没し、次男の英一がいま庄村矢部で木材商を営んでいる。福智屋はもと藩主板倉氏の御用を勤めた豪商で磯次郎は七代目になるという。代々臨済宗祐林寺の檀家で墓標は八幡山の野崎幻竜筋墓地の東側に数基ある。「新屋」（あたらしや）は三宅　治が分れ屋れて店を開いたが、これも大正の中頃に廃業し、そのあとはいまの吉備産業株式会社の一部になってしまった。「末広」は田回道を東へ曲った、いまの入江政一の屋敷である。この屋敷は藩政時代に三河屋という菓屋等の商家があった。亜堂に名を知られた草野蘆江翁（後と輯人物篇参照）の生家であったが、蘆江翁はひとり息子で亜道一筋に志ざして常に他郷に遊んでいたので、両親の死後その跡は轉々と他人の手に移り昭和十四年四月に小山倉吉が買い取った。所が隣接していた丸五運送店の倉庫から火を発して類焼したので新しく家屋を建てて米穀商を営んでいたが、故あって屋敷全部を山上初次郎に譲っていまは片宿に移った。初次郎は上田喜代子という女性を援助して末広という屋号で料理屋を開業させたのである。一時客足も繁く栄えたが、大東亜戦争が酣になって不振に陥り収入に比較して税金が高いといって、五、六年を経た終戦后の昭和廿二年頃に廃業した。喜代子はこの地を去って岡山市の柳川筋へ移り現在その子が料理屋を開業している。



（庭瀬駅前略図）

運送業としては丸五、梶谷、太田の運送店などがあった。丸五運送店は片宿に住むいまは故人になっているが、赤磐郡高月村出身の遠藤賢吾の先代忠雄が経営していた。梶谷運送店は庄村栗坂の八木某が開業していた。太田運送店はいま観音堂に住む太田俊子の実父になる太田俊三郎が、他の運送店よりも早く店を開いた。これらの運送業者は其筋の希望で、大正の六、七年頃に合同して庭瀬合同運送店となり会社組織にしたが、一年あまりで岡山合同運送会社に合併し

個人経営のものが全国的に乱立して

ておく訳に中かず荷主本位にした統合が断行せられて最近の動きは自動車輸送に移り減少の一途を辿つてきたので、昭和廿五年十月十六日ついに倒産した。そのあとに山上初次郎が移りこれも外国貿易を主にして次第に逼塞し、ついに倒産した。

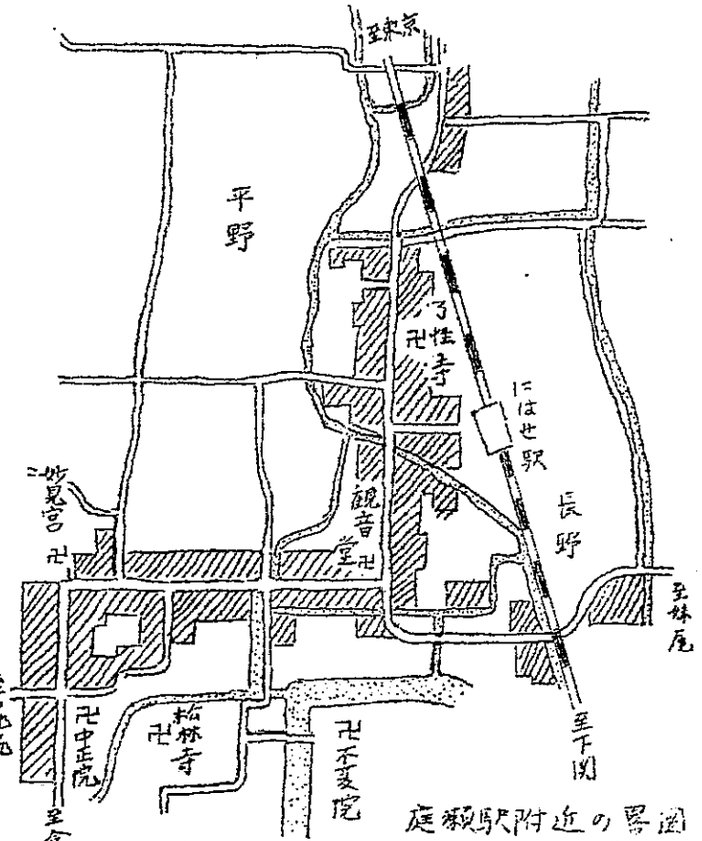


図 駅の近附 庭瀬駅 大正初年頃

よく問題が生じたのである。

店もあつたようである。それだけに運送店は莫大な儲けをしたものもあつた。かかる弊害が原因となり、また信用の薄い天秤棒一本という資力の乏しい諸掛費に無知な農があつた。これをつけ込んで法外な料金をとつた運送

た。更に同十六年に企業整備によつて日本通運株式会社に買収されて今日に至つている。

当時の鉄道貨物輸送は取扱が複雑であつたので殆んどの荷主は運送店の手を経なければ容易ではなかつた。従つて荷主は鉄道の運送料金や其他

花莚業を営んで財をなしたが、昭和十三年十月十四日七十三歳で病死いてその子の安太が業を継ぎ各地に支店を持ち店員を多く使つていたが、父に似ず商才にとぼしく不運にして中年から中風にかかり昭和廿二年七月二日七十歳で歿した。晩年には父の遺産は殆んどなくなつた。山上初次郎は西大寺市の三浦という商家に生れ山上家に養子した。初少から刻苦辛酸し庭瀬へ移つてから漸く財を積み、庭瀬では指折りの金持にのしあがつた。敏腕家であつたが彼の商道にはとかくの噂が巷間に流れているが、今は述べないこととする。

その屋敷はいま小西出身の勝本猪三男が買いとり、敷物新聞の発行の傍、花莚、畳表などを手広く経営している。

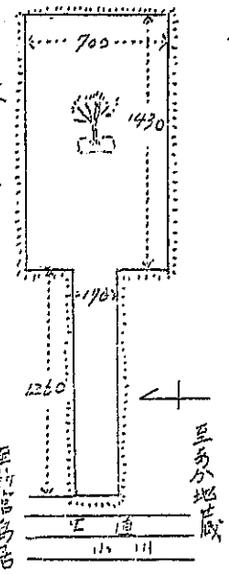
鉄道の開通と共に交通の一翼として発展したのが人力車である。駅前帳場は旧国道の西曲り角、いまの三宅理髪店と風早嘉源治の所にあつた。親方は箕島の林某で好況時代には二十台に近い人力車を有していた。車夫が常に詰めて待機などをもてあそんで客待をしていた。走る距離は北は吉備津、足守、稲荷さては高梁川に沿うた村落にまで及び、南は妹尾早島から天城を経て児島方面へ走り廻つていた。最も高梁方面とか、児島方面の遠距離の客には乗り継ぎといつて、途中の帳場でお客を乗り換えさせていた。この場合前もつて金区間の車賃を受取つているので差引して先方の車夫に渡すのである。いま一つは観音堂にも帳場があつた。親方は小車某でこれはいまの観音堂の真向い国富忠夫のあたりである。駅前側よりも帳場は小さく十台前後が常駐していた。そしてお客の奪い合いに往々車夫の間で争いが起つたので、区域が定められていた。お客が駅前側の帳場の前を過ぎると観音堂側の区域に属していた。汽車から降りたお客は多くは駅前側の人力車に乗るのであるが公定車賃がなかつたので車賃を吹ぎるのが常であつた。車夫がお客に付きそうて歩きながら交渉しているうちに帳場の前を過ぎると観音堂側の帳場の区域に入るので、それまでに

話がまとまらないと観音堂側の車夫がやってきて交渉をしなおすのである。この時観音堂側の車賃が高ければお客は駅前側の区域へ戻って来るものもあったという。また事情をよく吞み込んでいるお客は、お客の方で車賃を決めて利用したものもあった。こうして開通後十三年を経て同世七年十一月に中国鉄道株式会社の手によって吉備線が開通し同四十三年六月には宇野線が開通を見るに至って次第に庭瀬駅前の宿屋、料理屋は客足が疎らになり業者も生活が苦しくなって一軒へり二軒へり、また人力車も漸次衰え始め、駅前側も観音堂側もまもなく共倒れになってしまいわづかに「かもや」の傍、駅構内の一部を借り受けて四、五名の人力車が置かれたが、これも昭和の初め頃全く姿を消してしまった。明治の末頃の車賃は稲荷まで片道六銭、往復八銭であった。とくに上客としては妹尾の金持ちであった浅越　某はいつも汽車から降りると二人引き（車の手木へ綱をつけて走る早や車のこと）で走り、手盥りで二十銭掛って行ったという。浅越　某の顔があらわれると車夫たちは緊立してお辞儀をしていた。

△　駅前の田圃道は丁字型の道路で二間巾ほどであったので狭隘なため昭和六・七年頃に今上陛下の御大典紀念事業として当時山上初次郎の篤志で現在のように四間巾の道路に拡張された。実は替地として屋敷の裏を流れる溝渠をせばめて家屋きあとに引いたのであるが当時農業用水路であったので、農民からのはげしい反対で一時揉めたがどうにか話し合がついたのである。また昭和七年に新しくいまの国道が敷設したのでこれを機会に駅の寛当りで旅館業をしていた関　福次郎の屋敷を削り取ってまっすぐに国道へ通ずる道路が出来あがり、ついで八幡神社前まで延長した。これまで駅前から花房方面への通路は観音堂前を経て栄町の中正院の四ツ角に出て北へいって小学校・中学校の前を迂回する里道であったので捷径路として非常に交通至便になった。ここに始めて吉備町の玄関口としての面目を一新したのである。

○　柳殿の跡

東山の七三四番地に住む岡田　強所有の田園に溝尻という地名がある。広さ十一アールにしてその中央部に七本に十四本ばかりの面積の社地がある。傳説によると太古吉備津彦命が旅せられてここで食事を摂られた際、その箸を挿された楊柳が一本植えられている。昔はここの楊柳を切って箸を繁茂したという。いまは新しい楊柳が一本植えられている。昔はここの楊柳を切って箸をつくり吉備津宮の神饌に供したという。いまはその行事は絶え永く口碑として遺っていたが、大正の末頃に福田海がその周囲に石がきを繞い護摩の修法を行ったことがあるが、其後この行事もなく、ただ楊柳のみ青々と繁っている。俗に柳殿と呼ばれ吉備津神社の管理社地になっている。（護摩の灰という古い言葉がある。ものの本に「往時、街道に高野聖ニこうやひじりニに出でたちて、弘法大師の護摩の灰なりとて押売りせし者ありしより起るという。旅人の袈裟をなして旅人を騙かして物を盗む者ものの異名なり云々」。とある）。高野聖というは高野山の勧進（寄附）の目的で全国に出ていく僧のことである。その僧に変装して普通の焼灰を分体らしく紙片に包んで旅人から金を詐し取るのである。

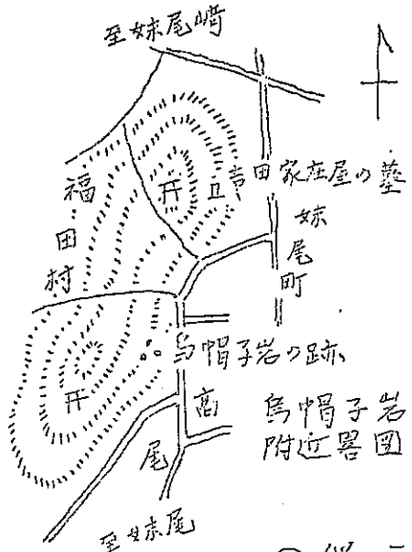


柳殿の跡平面図

○　烏帽子岩の跡

福田村高尾の山中に石材採取場がある。ここに近年まで烏帽子（えぼし）岩という大きな巨岩が空高く突起していた。頂上は十畳もあったろうか広い平らな石の上に「山の神」の石祠と、高

さ一米ばかりの自然石の表面を平らに削り不動明王の立像を浮彫りした石佛を安置し古くから靈岩として村落の人々の信仰の対象になっていたが、石材採取のため次第に石を切り崩しこの靈岩にも手を延ばし石仏を後方の山中に遷祀した。敗戦後の昭和二十一年頃には全く破壊してしまった。いまはその跡さ止めず石米以上もあろうか絶壁になった花崗岩の新らしい石肌の面が薄青色の無気味な光りをかがやかしている。



この靈岩を東方の麓から仰ぎ見ると恰度烏帽子の型に似ているので烏帽子岩の稱が起ったのである。

（烏帽子というは昔は冠（かんむり）の一種である。その種類は多く、折烏帽子、風折帽子、引立帽子、揉帽子、侍帽子などがあって時代により或は場所によって使い方も異っているが、大侍貴者は平常に用いる者は礼冠としたようである。この靈岩はそのうちの風折烏帽子の型に似ていた。江戸時代には諸大夫の礼服に定められた素襖に似た布直垂に長袴を着けた時に被る冠である。風折烏帽子は立烏帽子の頂を筋違いに折って前に伏せたものである。）

この石切場はいつ時代から採取が始められたものか文献はないが、大阪城の石がきに「高尾」の刻印があるという。これは天正の末、豊臣秀吉が築城の時、この地は五家荘の一人として栄えた備前大守宇喜多秀家の領有地であったので、その命によって献納されたものと考えられる。また口碑によると庭瀬古城址（撫川城）の築成石がきなどにもここから運搬されたという。少裾に石出し場という地名が遺っている。昔この神合は瀬戸内海に面した海浜で雁木があってここから各地方へ盥んに石材を舟で積み出していたのである。

この高尾（たこう）の石切場につゾてこんな話が残っている。明治の末期に庭瀬に木村栄一という若い石工がいた。栄一はこの石切場を舞台にひと賈けしようとしたが、資金が乏しかったので、觀音堂の内面奄の智光尾という尾僧に頼んで四百円の融資を受けて事業を始めたが、採算がとれず借金を仕拂うことが出来なかったので浚米して仏くことを決意し再び旅費のくめんを智光尾に頼み更に四百円を出させて浚航したが、アメリカでも成功せず三、四年たって再び庭瀬へ帰えってきた。もとより合計八百円の借金とそれに対する、くらかの利息も拂ふことが出来なかった。間もなく智光尾は七十二歳で大正五年十二月十三日に他界した。栄一も昭和元年に癌にかかって世八歳で没したが、智光尾の遺族は栄一の子の吾市に借金は拂引にするから智光尾の墓石だけは建ててくれと示談したので、吾市もこれに應じて松林寺へ遷墓した。しかし予算が超過したといって不足金を要求したが遺族は応さなかったという。栄一は石工として勝れた腕を持っていた。高杉町の小山にある某寺の石佛十一面観音は栄一の刻んだものである。このことがあってから吾市も病死し木村家では何かと不運がつづいた。これは智光尾の怨霊の祟りだという噂が巷間に流れ罪障の恐レさを人々は語り合ったということである。

○ 高木姓の起り

大帝日子於斯呂和氣命（おおたらしひこおしろわけのみこと）景行天皇と申すには后妃が数人あつてすべて二十一人の子福者である。そのうち一腹に生れた御子に吉備兄彦命、高木比売命など二男四女がある。また吉備津彦命の御弟の稚武吉備津彦命の御子の針間之伊那毘能大郎姫を婚りて出来た御子に日本武尊がある。つまり日本武尊は高木比売命の異母兄にあたる。そして吉備兄彦命は吉備の地に永く帰まりて死去されていることが旧記にみえるが、いまだにその墳墓は確められていない。或はいまの岡山市北方にある神宮寺陵がこの命の墳墓ではないかと史家の間で問題にされている。従って高木比売命もこの吉備の地に住まいされて終らされ、その子孫が高木姓を賜わり永く土着して数千年来栄えたものである。

○ 鉄砲場のあと

鉄砲場というは十アールばかりの川入の田圃の地名にして、いまは中国女子大学の建設の

ため敷地になつている。ここに幕末の堤、国事多端の時庭瀬藩が大砲を据えて射撃訓練を行つた場所である。目標となる的場は東北の入道谷という所の山肌に向つて盛んに打込んだものである。これに使用した弾丸は文字通り直径二糎ほどの丸形の鉄の塊りで炸裂するものではなく恰度石塊を投げ込んだような幼稚なものであつた。いまでも往々的場のあとから弾丸を掘り出すことがある。現に川入の高塚孝夫はその弾丸を一個保存している。

吉備津神社に縦六十二糎横二〇九糎の扁額が懸げられている。

銘に

慶應三年歳次丁卯夏四月十有三日顧方今形勢而庭藩之永昌　於吉備津社各以荻野流
砲術種嶋十匁丸持一寸的所発各渾中之因製扁以奉懸御堂前

庭瀬藩　渡辺亀山門人
石　能夫平義行
海野五郎吉滋野幸階
鈴木金治郎源方棋
沢田治蔵源良蔵
高塚亀吉源治道
野崎庄兵衛源通時
遠藤嘉兵衛平朝猷
坂井嘉吉源通脩
渡辺竹治郎源信幸
渡辺喜三郎源信連
保田数右衛門藤原臣孝
草埜安太郎藤原英行
徳田精太郎源富広
西村權四郎源老謙
字埜敏之助源直著
右各敬立馬百拝

一〇九

慶應三年四月十三日将に現今の形勢を顧みて、永く庭瀬藩の繁栄を吉備津神社へ祈念して各荻野流の砲術により種嶋十匁丸を一寸の的に発した所、各適中したので、扁額をつくり宮前へかかげ奉つたものである。

各氏名の上部に一寸角の紙片が張つてある。これが的の形である。当時射程距離がどの位であつたか判然しないが余程小さい的である。渡辺亀山門人とあるは名は寿吉、源元信といい、亀山はその号である。藩の御年寄禄高二百二十石、砲術の師範にして明治二年十月八日五十五歳で歿している。嫡子は門人中の喜三郎であるが、この人は明治七年五月十七日廿四歳で若死した。また寿吉が死んだ年に生れた庚の隼人があつたがこの人も同廿八年六月九日に廿七歳で他界し去嫡が絶えたので庭瀬市町川野屋高木久太郎の次男要次郎が夫婦養嗣となつた。子孫はいま東京に住すという。

（浮三輯寺院篇了性山中正院参照）

× 慶應三年は藩主勝弘三十歳の時で、大政奉還、王政復古の大業令の下つた年であるが、これに不服従を唱える一部幕府の旧臣たちの間では武力によつて抵抗せんとする騒然とした去情であつたから、庭瀬藩にあつても万一の場合に備えて常に軍事訓練がなされていたのである。

（おわり）

雑誌
書籍
文房具
目黒郁文堂
吉備局電二一九有線八一〇
吉備町・庭瀬

プロパンガス
ガス器具
石油類
各種燃料
備前瓦斯燃料吉備営業所
電話吉備局六三〇九番
有線二七〇三番
岡山市北長瀬
電話②〇五一一番